



Title	チベット難民における民主主義のジレンマ : 2015-6年度チベット亡命政府総選挙を事例に
Author(s)	片, 雪蘭
Citation	未来共生学. 2017, 4, p. 403-417
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/60715">https://doi.org/10.18910/60715</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# チベット難民における 民主主義のジレンマ

2015-6 年度チベット亡命政府総選挙を事例に

片 雪蘭

大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程

目次	キーワード
はじめに	チベット
1. 調査地概要	難民
1.1 ダラムサラ	選挙
1.2 チベット民主主義の始まり	民主主義
2. チベット亡命政府による総選挙の流れ	ダライラマ
2.1 選挙の仕組み	
2.2 政治犯の首相立候補	
2.3 選挙キャンペーンにおける差別	
2.4 選挙当日	
2.5 選挙後に変更された規定	
2.6 神の怒り	
おわりに	

## はじめに

2015年10月18日、北インドに位置するダラムサラ (Dharamsala)で、チベット亡命政府 (Central Tibetan Administration: 以下、CTA)の首相 (シキョン)と国会議員 (チトゥ)を選出する総選挙が行われた。インド政府とはまったく関係のないチベット難民による選挙であり、インドだけではなく世界中のチベット人が投票する。

政府が約60年間にわたる亡命状況を強いられるなか、総選挙を行ない、民主主義を成し遂げたということは民族的誇りの象徴でもある<sup>1</sup>。しかし、チベット人にとって神そのものを意味するダライラマ14世 (以下、ダライラマ)という存在、そして「亡命」という状況はむしろさまざまな問題を招いた。すなわち、ダライラマを批判する候補者への不公平な姿勢や宗教による政治への干渉といった問題が生

じたのである。

筆者は北インド・ダラムサラに2015年5月から2016年1月までフィールドワークを行った。本稿は、選挙キャンペーン時期から選挙終了後まで生じた一連の事件を中心に、現在、チベット難民社会が抱えている問題を描く。

## 1. 調査地概要

### 1.1 ダラムサラ

ダラムサラは北インドのヒマチャル・プラデーシュ (Himachal Pradesh)・カングラ (Kangra) 地区にあり、標高1,900メートルの山岳地域に位置している。ダラムサラには2009年の時点で13,701人のチベット人が居住しており、インドのなかではもっとも多くチベット人が生活している居住地である (Planning commission 2010: 13)。難民居住地ではあるものの、南インドのチベット難民居住地とは違って別途の許可証を必要とせず、自由に出入りが可能である。

ダラムサラにはチベット亡命政府のCTAがあり、ダライラマが居住していることから、チベット難民社会の首都のような機能を果たしていて、「リトル・ラサ (Little Lhasa<sup>2</sup>)」とも呼ばれる。難民受入所があるため、多くの新規難民が暮らしている所であり、CTAの役人やNGOのスタッフを務めている長期化難民も生活している。そのほか、ローカルのガディ (Gaddhi) 人、出稼ぎに来ているネパール人やカシミリ系のインド人も多い。また多くのインド人や外国人が旅行地として訪れる場所でもあるため、実に多様な人々が生活する空間である。

ダラムサラへはデリーからの夜行バスで行くことができる。デリーのチベット人居住地であるマジュヌ・カティラ (Majunu-ka-tilla) から毎日数本、民営の夜行バスが出ており、約12時間かかる。バスの値段は普通バスだと700ルピー (約1,100円)、エアコン付きだと900ルピー (約1,400円) する。普通夕方の6時～6時半に出発し、翌日の午前5～6時には到着する。

夜明けのダラムサラはかなり暗く、バスから降りると客引きするタクシー運転手や迎えに来た人々以外は見当たらない。ターミナルから2分ほど歩くと大きな広場に出ることができる。空が少しずつ明るくなると、広場にはバレップ (チベット式パン) を売るチベット人と卵や牛乳を売るローカルのガディ人を見かけることができる。時間が過ぎると徐々に朝食を売るお店などが開店し始める。広場からは五つの通りが放射状に伸びていて、各々の道にはレストランやゲストハウス、

両替屋、売店などがぎっしり並んでいる。建物は尾根伝いに点在しており、「ルンタ<sup>3</sup>」という旗が繋がっている建物はチベット人が居住していることを意味する。道にはモモ (チベット式餃子) やチャイ (ミルク茶) を売る人もいる。チベット人の多くはチベットから仕入れた宝石や数珠を売るものが多く、中には手作りセーターやマフラー、インドやネパールの卸売市場から買い取った衣類とスカーフなどを売るものもいる。

### 1.2 チベット民主主義の始まり

1959年、中国のチベット侵攻後、ダライラマを含む8万人のチベット人は中国の弾圧から逃れるためインドへ亡命した。ダライラマは亡命当初の1959年4月29日、ムスリー (ウッタラカンド州) に亡命政府を設立したが、1960年5月にダラムサラに移され今日にいたっている。CTAは、チベット難民社会の事実上の政府であり、自らを「チベットの内外にいるチベット人を代表する唯一の政府」と表明する。国際社会から認められた政府ではないものの、チベット人はチベットを「国家」、CTAを唯一の政府として認識している。

CTAの前身は「ガンデン・ポタン (Ganden Phodrang)」であり、1642年から中華人民共和国がチベットを侵略した1951年までに存在した正式なチベット政府である。政教一致の政府であったガンデン・ポタンは宗教部と世俗部に分けられ、宗



写真1. CTAの敷地

教部は僧侶が、世俗部は俗人の貴族が担当した。各々の部には300人ほどの役人が所属していて、僧侶は仏教に関する問題に関与し、貴族は実務的な行政を担当していた(Saklani 1984: 267)。特に、国家のあらゆる行政を担当していた内閣の「カシャ (Kashag)」はガンデン・ポタンでもっとも重要であり、現在のCTAでも内閣として継続されている。

ダライラマはCTAを樹立した当時から民主化を目指し、大胆な改革を行った。ガンデン・ポタンからは内閣に当たる「カシャ」だけを残し、教育省、財務省、内務省、情報国際関係省、宗教文化省、安全省、健康省の七つの省を新しく設立した。1960年9月2日にはチベット亡命議会 (Tibetan parliament-in-exile) が設立され、その日は「民主主義の日 (Democracy Day)」として、チベット難民社会の祝日になっている。現在における国会議員は45名であり、25才以上のチベット人であればだれでも選挙に出馬できる。議員は地域議員と宗教議員の二つに分けられている。まず、地域議員はチベットの三地域であるウツァン(U-tsang)、カム(Kham)、そしてアムド(Amdo)を出身地とする議員が各10名ずつ選出される。また、チベット仏教の4宗派<sup>4</sup>と土着信仰であるボン教からは、それぞれ2名の議員が選出される。さらに5名が海外から選出される<sup>5</sup>。

1991年6月14日には議会によってチベット亡命憲法が公表され、続いてはその憲法に基づいて1992年3月11日に司法にあたる最高司法委員会 (Tibetan Supreme Justice Commission) が設立される。ダライラマが亡命して約30年が過ぎた時期に三権分立が確立された。

さらにダライラマは自分の政治的権限を首相に移譲させた。近年まで、ダライラマは政治的リーダーとして、内政はもちろん外交といった政治問題にも関わってきた。しかしながら、民主主義が完成するために僧侶が政治的リーダーを兼任することは望ましくなく、チベット人が自ら選んだリーダーが治めるべきだと考えたのである。その結果2011年3月10日、ダライラマは政治的問題には一切関与しないと宣言し、その年から初めて首相の直接選挙が始まる。したがって今回の総選挙は、ダライラマの政治的リーダーからの引退後に行われる二回目の首相選挙であると言える。

## 2. チベット亡命政府による総選挙の流れ

2015年から2016年にかけて、全世界に広がっているチベット人はCTAの首相

と議員の選挙を行った。今回の選挙は、第15代目の首相と第16代目の議員を選出する選挙である。選挙は6ヶ月間、二回に分けて行われるのだが、第一回目は2015年10月18日に、第二回目は2016年3月20日に行われた。

本節では、選挙の始まりが宣言された2015年6月10日から選挙終了後までのあいだに起きた事件を中心にその様子を描写する。まずは、チベット難民社会において選挙がどのような仕組みになっているのかを簡単に説明しよう。

### 2.1 選挙の仕組み

CTAの総選挙は5年ごとに行われる。選挙はCTA傘下の選挙委員会 (Election Commission、以下EC) が主管するのだが、世界各地に各々の地域選挙委員会が設けられている。投票はインドや日本を含む30カ国で行われ、有権者数は約9万人に及ぶ。

選挙権を得るためには、事前に有権者の登録が必要とされる。有権者登録ができるのは18才以上であり、「ランチェン・ラグデップ (Rangzen Ragdep)」、つまりチベット人ということを証明する身分証を所持していなくてはならない。ランチェン・ラグデップは、チベット難民社会のみで通用する身分証明書であり、チベットで生まれたチベット人、もしくは海外で生まれていても両親のいずれかがチベット人であれば申請することができる。CTAが1971年から発行し始めたもので、その形からグリーン・ブックとも言われる。ランチェン・ラグデップには、出

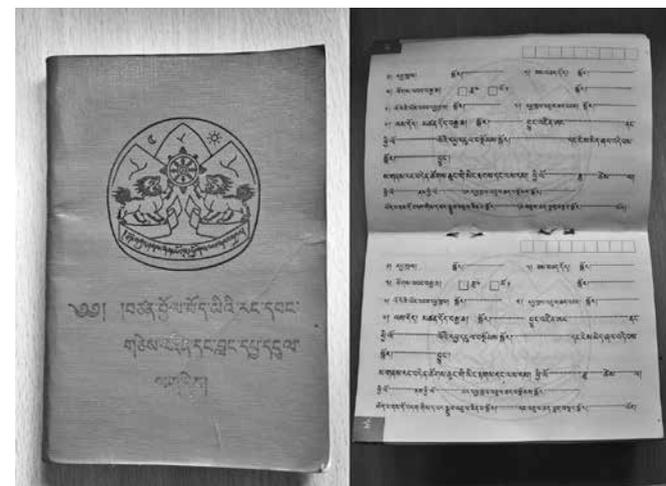


写真2. ランチェン・ラグデップ



写真3. 自発的納税をしている様子

身地や年齢、両親の名前などが書かれていて、毎年行われる「自発的納税(voluntary contribution)」の証明書の役割も果たしている。

有権者登録をするためには、この自発的納税を事前に行う必要があるため、筆者がダラムサラへ到着した5月は多くの人々が納税をすませていた。自発的納税とはいえ納入額は決められている。選挙のため税金を払おうと思っていたあるインフォーマントは、一年間の税金47ルピー（約80円）を払っていた。これは職業や年齢ごとに決められていて、それほど負担がかかる金額ではない。また、海外に滞在しているチベット人の場合は、国ごとに異なる金額を税金として払っている。在ネパールやブターン・チベット人の場合は、在インド・チベット人と同様である。そのほかの国に対しては、職を持っている成人の場合は96ドルを払っている。

## 2.2 政治犯の首相立候補

ECは2015年6月10日に記者会見を開き、選挙が始まったことを公式的に宣言した。これは選挙に出馬する候補者の登録が始まり、さまざまな告示事項を表明することを意味する。

今回の選挙において最も興味深かったのは、中国で政治犯として投獄され、釈放後にインドへ亡命したルカル・ジャム(Lukar Jam)が首相の候補として出馬したことであった。今回の首相選挙には前首相であるロブサン・センゲー(Lobsang Sangye)<sup>6</sup>を含めた5名が立候補したのだが、ルカル・ジャムだけがチベットから直接、亡命した者であり、チベットの「独立」を主張した。そして、残りの4名は全員インドで生まれたものであり、チベットの「自治」を主張した。難民社会にお

いて「独立」の問題は当たり前のことかもしれない。しかしながら、チベット難民社会において「独立」は、非常に敏感な話題であった。

チベット難民社会ではチベットの未来像を描く際、大きく二つの方法を考えていると言われる。「ランチェン(Rangzen)」と「ウメラム(Umelam)」だ。ランチェンは「独立」という意味で、究極的にはチベットの完全なる独立を前提としてCTAの政策を進めていくことである。一方、ウメラムは「中道(middle-way)」という意味であり、中国政府に対して独立は提案しないものの、高度の自治権を得ることでチベットの伝統や文化の保存を促す政治的方向である。ダライラマは、1980年代からこの「中道政策」を積極的に主張し、CTAも公式的にはダライラマの意見を受け継いでいる。すなわち、中国政府や世界各国に向けてチベット亡命政府は独立を主張せず、自治を主張しているのである。

問題は、多くのチベット人がダライラマを崇拝するチベット仏教徒であるため、ダライラマに逆らう意見を発言すると、その内容に関わらず裏切り者とされる傾向があることである。したがって、今回の選挙においてルカル・ジャムの登場が興味深いのは、チベットの独立問題を公にした人物に対するCTAと人々の反応であった。「中道」の路線を歩んでいるCTAにとって彼の存在が負担であったにちがいない。実際のところ前首相のロブサン・センゲーの人気の高いため、彼が再選される確立が高かった。それにもかかわらず、ルカル・ジャムに対するCTAや人々の行動は妨害作戦にほかならなかった。その詳細については、次項から説明しよう。

## 2.3 選挙キャンペーンにおける差別

2015年9月のある日、一人のインフォーマントが興奮した状態で筆者の意見を聞くために電話をしてきた。現在、デリー大学の修士課程にいる彼は、そもそも政治への関心が高く、今回の選挙においても積極的に話をしてくれた。「ダライラマは尊敬するけど、ダライラマが述べているからといって必ずしも正しいとは限らない。我々チベット人は物事を批判的に見る必要がある」と、しばしば述べていたのだが、その理由は、ダライラマが主張する「中道政策」を彼は同意できず、チベットは独立するべきだと考えていたからだ。彼は当然ながらルカル・ジャムの支持者でもあった。

当時は、選挙のキャンペーン期間であり、5名の立候補者はインド国内を回りながら各チベット難民居住地で演説や公聴会をしていた時期であった。ルカル・ジャムもインド国内を巡回しながら演説をしていた。主に、多くのチベット人が住ん

でいる南インドやデリーで行っていたのだが、デリーでの演説が突然キャンセルされたことがインフォーマントの怒りの原因であった。

特にデリーは多くのチベットの若者たちが大学に通っているところでもある。デリーに住まいがない学生のため、チベット難民学校である Tibetan Children's Village (以下、TCV)傘下のホステルが設けられている。インフォーマントの彼自身も大学で勉強をしていたため、このホステルで生活していた。突然キャンセルされた講演会はこのホステルで計画されていた。これは、学生たちが自らルカル・ジャムの講演を聞きたく、招いたものだったという。しかしながら、ダライラマの妹 (TCVの責任者)によって突然ルカル・ジャムの演説が禁止された。理由は、ダライラマに逆らう不純分子がチベットの若者たちを煽動する恐れがあるからであった。それ以降、ルカル・ジャムはTCV関係の場所で一切演説の許可が得られなかったという。このようなことは、選挙規定に違反することであるにもかかわらず、ECからは公式的な告知や仲裁もなかった。

さらにその後、もう一人の立候補者であるペンパ・ツェリン (Penpa Tsering)が徹底的にルカル・ジャムを批判し始めた。他の候補者に対する批判は、選挙キャンペーンにおいてごく普通の光景であろう。しかしながら、その批判の根拠となるものが、単にダライラマに逆らうものだからということの問題であった。公式に設けられた候補者同士の討論会において、ダライラマを批判するような者とは同席できないということでその討論会はキャンセルされた。

ルカル・ジャムの登場は、いままでチベット難民社会においてタブー視されていた「独立」やダライラマを批判するという問題を公にさせた結果となった。政府関係者や知識人だけではなく、一般のチベット人の間でも頻繁に議論するようになったのである。「ダライラマがおっしゃることはすべて正解だ」「ダライラマの意見だからといってすべて従わなくてもいい」など、さまざまな意見が出てきた。なかには独立を主張する者も当然ながらいる。しかし、一般的にダライラマに逆らうことはタブーのようなものになっているため、独立を主張すること自体がアンチ・ダライラマとなる傾向があった。

そもそもルカル・ジャムは、自分の故郷の人々にダライラマの著書を紹介しようと、CDや本をチベットへ密かに持ち込んだことで中国の警察に逮捕された政治犯だ。彼自身、仏教信者としてダライラマを崇拝しているのだが、宗教と政治を完全に分離して考える人である。実際、その重要性を演説でも強調していた。しかし、CTAの役人を含む一般の人々は、宗教と政治の分離を理解してはいるものの、

完全に受け入れてはいない。後述するように、ルカル・ジャムに対する非難や妨害を当たり前に考え、宗教による政治への干渉を自然に受け入れる。国を失われた難民にとって、独立への願望より宗教の影響がより強力であることが、この選挙において明らかになったと言える。

## 2.4 選挙当日

2015年10月18日、いよいよ選挙の投票日 came。投票は朝の朝8時から夜7時まで、ダライラマ寺 (ナンギャル・ゴンパ)、CTAの敷地、学校などで行われた。筆者は、特にダライラマ寺での投票の様子を観察した。

ダライラマ寺では、数日前から投票場の組み立ての準備をしていた。投票場は大きな布だけで区切られており、開放的である。机と椅子が用意されていて、一人ずつ入り、投票すればよい仕組みになっていた。上述したように、チベットは大きく、ウツァン、カム、アムドの三つの地域に分けられるのだが、自分の出身地によって投票できる場が決められるため、投票場も大きく三つに分けられていた。ウツァン、カム、アムド出身の人々のインド国内での人口比率はそれぞれ5割、3割、2割ほどであるため、ウツァンの投票場が最も大きい<sup>7</sup>。

投票を望む人々は、投票場に入場するとまず有権者登録済みであるかを確認する。デスクには数人のEC関係者が座っており、ランチェン・ラグデップを一人ずつ確認する。確認が済むと投票用紙が配られるのだが、配布済みであるという証拠として親指の爪に油性ペンでの印をつけられる。



写真4. ダライラマ寺の投票場



写真5. 人々が投票用紙をもらうために列に並んでいる



写真6. 投票用紙をもらった証拠として親指に印をつけている

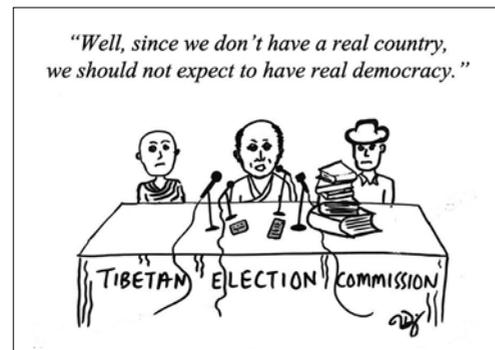


図1. Tendor Dorje 作  
(<http://www.thissketchyworld.com>)

投票は、リストに本人が望む候補者の名前の書き込む形式である。首相の場合は自分が望む立候補者の一人だけ選んで名前を書き、議員の場合は自分の出身地からの立候補者40名のなかから10名だけを選んで書き込む。このとき、女性の議員を少なくとも2名記入しなくてはならない。僧侶である場合は地域議員に加えて、自分の宗派に従って2名を記入する。

投票場で出会ったあるインフォーマントは、特に宗教議員という仕組みについて不満を抱いていた。「現在は21世紀だ。ダライラマも政治に関わらないと宣言されたのに、いまだに僧侶議員があるのは時代遅れだ。世界が見ているのに、恥ずかしい」と述べていた。この発言のように、近年には西欧の制度や文化に慣れてきた若者が多く、CTAの選挙制度への批判が出る傾向にある。しかしながら、政治と宗教を同一視する傾向はチベット難民社会に残っており、次節で説明するルカル・ジャムに対するCTAの対応からもそれが読み取られる。

## 2.5 選挙後に変更された規定

2015年10月19日、第一回目の選挙が終わった翌日。ECはいきなりの規定変更を告知した。5名の立候補者のうち最多の得票数を得た2名だけを最終選挙の候補として認めるということであった。本来の選挙規定には最低2名の候補者が最終選挙に出馬できるとしか書かれていない。そもそも非常に曖昧な規定であり、その基準は定められていなかった。ところが、2位と3位の得票数差が20%に及ばないと3番目の候補者は脱落させるということを選挙の翌日に公表した。もちろん、ルカル・ジャムが3位であった。また、2011年度総選挙の際は、第一回目の選挙



図2. ルカル・ジャムをサッカー選手として描写した絵。独立を意味する「Rangzen」のゼッケンをつけている。Jamyang Phuntsok 作  
(<http://www.jamyangnorbu.com/blog/2015/11/13/>)

に出馬したすべての候補者が最終選挙への資格を得られたため、今回もそうであろうと人々は思っていた<sup>8</sup>。これは、ルカル・ジャムを事前から阻止するつもりだとしか考えられないことであった。

特にルカル・ジャムの支持者たちはCTAの対応に失望した。彼らはルカル・ジャムの首相当選を信じてはいなかった。チベット人はまだルカル・ジャムを受け入れる準備がされていないと考えていたからである。ただ、最終選挙に3位で上がることは、チベット難民社会における革新的な変化であると感じていた。その希望が挫けられた。ルカル・ジャム支持者たちの当時の心境は、図1や図2の風刺画からも見て取られる。

これは、チベット人だけではなく、海外からも非難を受ける結果となった。チベッ

ト亡命社会は自分たちの民主主義が適切に運営されているのかを確認するために、欧米やアジアの国々の関係者を招き、選挙の全プロセスを監視させる。当然ながら、さまざまな監視団体から憂慮の声が聞こえた。CTAとEC宛の声明書がネット上に公開された。その声明書には今回の選挙がどれほど不公平に運営されているのか、チベット民主主義の未来のためには改善の必要を感じると述べていて、27名のチベット・サポーターが署名していた。

それに対し、CTAは10月27日に次のような返答をした。「チベット社会は難民社会であるため、独立したほかの民主主義国家と比較することは不可能である」と述べたのである（CTA 2015）。難民社会であるにもかかわらず民主主義を実現していることは自慢すべきことである反面、難民社会だからこそ完全な民主主義を期待することは不可能であるというこの発言は、チベット難民社会が抱えている矛盾をありのまま見せている。

## 2.6 神の怒り

第一回目の選挙が終了した後、結局、ルカル・ジャムは最終選挙に立候補できず、そのまま脱落した。それでも表面的には、最終選挙まで順調に進んでいったかのように見えた。しかし最終選挙が終わり、当選結果がまだ出ていなかった2016年4月のある日。「ネチョン・チジェ（Nechung choeje）」というシャーマンが今回の総選挙に関して「預言」を下した。

チベットには二つの種類のシャーマンが存在する。僧侶に護法神が憑依した「クテン（Kuten）」と一般人に山神が憑依した「ハワ（Lhaba）」がそれに当たる。特に前者の「クテン」の場合はチベットの歴史上、僧院と政治に関わった役割を果たしており、高僧の転生や国家の大事を定める際に大きな役割を果たした（チョルテン 2015）。なかでも最高のクテンがネチョン・チジェである。

CTAの敷地内には小さなお寺が一つある。ネチョン寺だ。ネチョン寺は16世紀に初めてラサに建てられた寺院であるが、ネチョン・チジェがダライラマのインド亡命にも同行し、現在もダラムサラにおいて受け継がれている。筆者が初めてネチョン寺に訪問したときには、法堂に仏像もなく、僧侶たちの様子も少々異なる雰囲気を出していたことを覚えている。外見は仏教であるものの、中身はチベットの土着信仰であり、ダライラマ自身もネチョンに対して仏教ではないことを公式的に表明したが、仏教行儀にはいつも参加し、ダライラマに預言を下している。

ネチョン・チジェは最終選挙の終了後、当時の内閣関係者と議員たちとの非公

開面談にて「預言」を下したのだが、その内容は「今回の選挙の運営は間違っていて、それはダライラマの健康と生に否定的な影響を与える恐れがあるので、立候補者たちはダライラマに謝罪することが望ましい」ということであった（Phayul 2016）。これは単なるハプニングのように見えたのだが、その後、最終選挙における二人の首相立候補者はダライラマに謝罪をし、記者会見でも再度、チベット人に対して謝罪した。

筆者はこの時期にダラムサラに滞在していなかったため、現地の雰囲気は知ることができなかったが、数人のインフォーマントから連絡をもらうことができた。なかでもルカル・ジャムの支持者であったインフォーマントは、「総選挙の終わりを飾る最高の出来事である」と皮肉な言い方をしたのであった。

## おわりに

2016年4月27日、ECは最終選挙の結果を発表し、ロブサン・センゲの再当選を定めた<sup>9</sup>。彼は人気が高かったため、十分予測できる結果であった。しかし、チベットの独立を主張したルカル・ジャムが立候補したことは、チベット難民社会が抱えている問題を公にさせたことも事実である。

すなわち、ダラムサラにおけるチベット民主主義は、ダライラマの存在によって政治と宗教が微妙に混ざった形をしていて、非合理的側面を有しているということである。特に、本稿で説明した2015-6年度チベット亡命政府総選挙において、ルカル・ジャムに対する意図的な排除と人々による非難、CTAの対応やシャーマンによる政治への干渉は、政治と宗教が完全に分離していないことを表している。

チベットは長い間、ダライラマを長とする政教一致の社会であった。ダライラマは自ら政治的リーダーから引退し、僧侶の役目だけを果たすと宣言したことで、政教分離を促した。しかしながら、6世紀も続いたダライラマの権威が数年間で人々の認識から去ることは難しいだろう。いまだにダライラマの権威は絶対的であり、彼の言葉は神の言葉と同様である。さらに、目の前にダライラマの住まいがあるダラムサラでは、このような考えが一層強いのではなかろうか。

ダライラマは、その存在だけでチベット内外にいるチベット人を結束させてはいるものの、彼によって生じる混乱、特に民主主義における矛盾は無視することはできない。しかしながら、投票場で出会ったインフォーマントのように、現在チベット民主主義が抱えている矛盾を認識している若者たちが増えつつある。ダ

ラムサラの雰囲気も変わりつつあるなか、5年後に行われる次の選挙において、どのような変化が生じるかは今後の課題としたい。

## 謝辞

本報告は、「平成27年度笹川科学研究助成」と「平成27年度澁澤民族学振興基金大学院生等に対する研究活動助成」により遂行された調査の一部に基づく。本調査にあたって、いろいろな助言をくださった方々や自分の意見を率直に語ってくれたダラムサラのみなさまには心より感謝申し上げたい。

## 注

- 1 「民主主義」に当たるチベット語は、「マンツォ (Mangtso)」である。
- 2 チベットの首都。
- 3 「風の馬」という意味のルンタはチベット文化圏ではよく見られる青、赤、緑、白、黄色の旗であり、仏教の経典が書かれてある。風によってその経典が世界に広がることを願って山の頂点や建物の屋上などの高いところによく飾られている。
- 4 ゲルック (Geluk)、カギユ (Kagyü)、サキヤ (Sakya)、ニンマ (Ningma) がそれに当たる。
- 5 ヨーロッパより2名、北米より2名、アジアより1名が選出される。
- 6 首相は、二度までの選出が認められている。
- 7 1959年、ダライラマとともにインドへ亡命した約8万人のチベット人は主にウツァン出身である。その理由は、ウツァンがネパールやインド国境ともっとも近いということがあり距離的に近かったこと、またウツァンは首都のラサカが位置している場所でもあったため、ダライラマが亡命したという情報をもっとも早く得ることができた。アムドヤカムは、インドとの国境からも遠く、亡命先への出発が遅かったため、比較的に人数が少ないとされる。
- 8 2011年度総選挙において、ECは首相立候補した6名を全員最終選挙に再度出馬させた。ただ、3名は自発的に辞退したため、最終的には3名による最終選挙が行われた。
- 9 チベット外にいる約130,000人のチベット人のなかで90,377人が有権者登録をし、59,353人(65.6%)が首相選挙に、58,615人(64.8%)が議員選挙に投票した。

## 参考文献

チョルテン・ジャブ

- 2015 「チベットアムド地域におけるシャーマンの職能者『ハワ (lha ba)』についての考察」『日本チベット学会会報』61: 61-74。

CTA

- 2015 Clarification to the group of Tibet Supporters who have expressed concerns about the Tibetan Election Process in the media dated 13 October 2015.  
<http://tibet.net/2015/10/clarification-to-the-group-of-tibet-supporters-who-have-expressed-concerns-about-the-tibetan-election-process-in-the-media-dated-13-october-2015/> (2016/9/30アクセス)

Phayul

- 2016 State Oracle Nechung rebukes CTA top brass.  
<http://www.phayul.com/news/article.aspx?id=37348> (2016/9/30アクセス)

Planning Commission

- 2010 *Demographic Survey of Tibetans in Exile-2009*. Dharamsala: Central Tibetan Administration.

Saklani, G.

- 1984 *The Uprooted Tibetans in India: A sociological Study of Continuity and Change*. Cosmo Publications.